あごら

さっぽろ

82' 7.30 発行

NO 43

あごら札幌連絡先　細田英理子
TEL　644-2927
通信担当　〃

今月の内容

合宿報告 …… 1
"今、戦争を考える" NO10報告 …… 2
NO11案内 …… 3
8月例会案内 …… 3
お知らせ …… 3
「原爆の図」をみて …… 4
「声なき叫び」をみて …… 5
「声なき叫び」交流会に参加して …… 5
情報 …… 6

合宿報告

7/11・12、13名の参加で行なわれました。第一部は"私とあごら"、第二部は"性について多いに語ろう"、第三部は"これからの方向"でした。

《第一部》

それぞれ"私とあごら"というのを語った。「主婦的状況の突破口であり実際の生活が変った」「けい発される場」「自分に自信が持てるようになった」「月2回の例会は負担」「主婦と接点を持てないと思っていたが、違った。大黒字という感じ」等々。

これからの問題として、あごらもひと頃より人数がふえてきたので、会の持ち方を再考しようという意見が出ました。また外部との関わりについても話されました。賛同グループに名を連ねたり、実行委員会に入ったりするのはもっと慎重に、その都度、十分話し合ってから対処していこうということになりました。(細田記)

《第二部》 性について

夜も更け、お腹もすいて、一休みしたところでとりとめない話がはじまりました。明け方まで7〜8人が話しこみましたがテーマは性全般にわたり、時々笑い声があがりながら、自分の体験やこんな男と女の関係がありえたらすばらしいとやら、様々なことを言いあいました。さすがに大半のメンバーが性を自分にとって正直にとらえ、嫌な時ははっきりと拒否できる強さを持ち、性そのものよりも、男と女のよりよい関係に深い関心を抱いているのだなあと感じられました。楽しい、それぞれが親しみをより深くできた一夜でした。(今村記)

《第三部》これからの方向

合宿の2日目、"今、戦争を考える"連続講座が終ったあとどうするのかについて話し合われました。

前日の第一部で"あごらとは何？""あごらと私"というテーマで話された中に、他の組織の中に参加していく場合、今までは個人としての参加であったこと。あごら札幌としての組織で関わっていく場合はこれからもあると思うので、その場合はどうするのか、賛同グループという形では一切お断わりということなのか、これからももっとこの問題は継続して話し合いが必要と思いました。

また個人で関わっていく場合も、その人個人だけの問題ではないわけで、やはり、あごらの人が支えていく部分があってもいいのではないのか、等々の話が出ました。そうした話し合いをふまえた後の第3部で、講座が終った後、文集作りをしたい、文集を作るのならばじっくりと時間をかけてよりよいものを作りたい。（文集づくりは来年？）

今年は講座が終った後、12月講演会に向けてはどうか？　講演会を12月にするとすれば誰を呼ぶのか、どういった内容にするのか、この問題に関しては8月13日前後に拡大運営委員会を開いて決めていくことになりました。（加藤記）

今、戦争を考える＝連続講座第10回報告＝

「世界の中の日本、食糧事情」　7/17

レポーター　広瀬直子、司会　高橋芳恵

自民党政府による「非核三原則」の骨抜き化、教科書の歴史記述の改ざん等、反動化への露骨な動きの中、生活への不安、危機感を感じていた私たちにとって、今回のテーマ「食糧事情」もまた、"豊かで便利な生活"の基盤が何とも頼りないことを明らかにするものでした。食糧の大半を輸入に頼り、しかも国内では農業つぶしが行なわれている現実。そして"豊かさ"までが発展途上国の犠牲の上に成りたっていること。暗たんたる思いにかられたのはひとり私だけではないと思います。

食糧のほとんどがいわゆる食糧大国とひとにぎりの穀物メジャーによって握られているという報告、世界のパン籠アメリカの穀倉地帯が農薬・化学肥料の多投化、水資源の枯渇によって砂漠化しつつあるという報告。どれ

一つをとってみても、アメリカに頼りきる世界一の食糧輸入国日本に、大きな問題として投げかけられています。

いくつかの歴史的事実に証明されているように、投機の対象、外交の武器としていつでも使われ得る物、それが生命の維持に欠くことのできない"食糧"なのですから----。

次の世代や他国の人々の生命をかすめとるような生き方は、今すぐできるところからでも改めたい……。そう思わずにはいられませんでした。

討論の中では「大型店の問題」や、「安全な物だから…というだけの買い方を見直す必要もあるのでは(=最近の健康食品・自然食品のお店の中には右翼が経営しているものもある)」など、私達の購買姿勢に直接かかわる、重要な視点からの意見も出されました。

8月例会 ごあんない

「女と仕事」 (レポーター 細木昌子
日時場所 8/13(金) 18:30～ 喫茶のあ 511-1377)

5/8発表の「雇用における男女平等の……」報告書(男女平等ガイドライン)を検討する予定

1 78'労基研報告が出された以後の情勢
2 今回の報告書の内容

> 等を具体的資料に基づいて検討したうえ、今の私達と結びつけて討論しよう

次回講座 ごあんない

「今、戦争を考える」NO11

「従軍慰安婦」 (レポーター 今村稚子
日時・場所 8/22(日) 18:30～ 喫茶のあ 511-1377)

お知らせ

9月に"今、戦争を考える"講座第12回を行ないます。

「戦争に向う選挙制度を考える」

今国会で成立の運びとなっている参議院全国区の選挙制度の改悪では自民党案、社会党案にしても無所属議員選出の道を細くしてしまっています。全国区は金がかかるということだけで将来の小選挙区制を狙うような法律案に反対していかなければ、戦争への道へつながっている第一弾を絶対許してはなりません。自衛隊の56中期業務見積りも今後、国民総生産の1%を超えることも必至の状況です。日本国の最高の議決機関である国会の選挙制

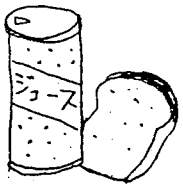
度を再度見直してみたいと思ってます。（中山記）
※　7/17の講座後の話し合いで、この"公害法改正"をめぐっての講座を持ちたいという話が出ました。9/20前後に婦人有権者同盟の岩本睦子さんにレポーターをお願いしました。詳しくは例会及び次回講座の時にお話します。

★「原爆の図」を観て　―加我博子―

「原爆の図」展に来た小学生を前に、丸木位里・俊さんは「本当にごめんなさい」と何度も繰返した。戦後37年間、戦争反対と叫び続けてきたが、この右傾化の波をとめることができなかった。それを子供達に「すみません」と謝るのだ。この言葉は子供を守らなければならない大人として、その場に居るのも恥しい思いだった。

大きなキャンバスには「予言」にも写っている石のような赤ん坊や、全身にガラスがつき刺っている少女、そして数え切れない人々のこの世のものとは思えない光景が描かれていた。自分の感性に忠実に絵を眺めてみると、あらゆる差別がみえてきて、（朝鮮人に、老人に、子供に、女に、そして人間に対する）それらを全てひっくるめた所に戦争があるという事がはっきりとわかった。反戦の想いを抱く沢山の市民がこの様な絵画展を開催し、大勢の人が戦争を直視できる機会を得られた事は、私達市民の力がファシズムを越えてゆくスタートになると思う。

もう一つ印象的だったのは、便利な事が文明か、原子爆弾で沢山の人を殺す今が文明といえるかという俊さんの生の声による問いかけだった。この時も又私は恥しく逃げ出したい気持でいっぱいだった。講演会を手伝うために子連れで行き子供にハンバーガーとファンタを夕食代わりに食べさせている私にどうして本物の心で声で人に語る事が出来ようか！こういう滑稽さはこの資本主義社会の中で生活していると多少なりとも出合う事だが、けれども、このような部分こそ、小さな私達にでもできる反戦行動なのだ。机にファンタをのせて俊さんのコカ・コーラの話を聞いていた娘が「あの時はとても恥しかった」と言ったのはほんの少しの救いだったか。この感性を大切にさらにふくらませてほしいと思う。



いずれにしても「原爆の図」は私の生を足元から揺さぶり激しく問いかけてくるものであったことは確かだった。

★「声なき叫び」をみて

細木昌子

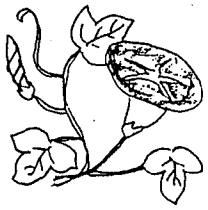
7/21 声なき叫びの自主上映会をみにいきました。帰り、ホテルリッチでの交流会へは行くのをやめました。とても疲れたからです。けれど、翌日、翌々日とだんだんあの映画の印象が深く広くなってきました。すばらしい映画でした‥‥。

一つ、わかりやすい。言いたいことが映画監督と編集者との会話場面でそのままことば化されるから。クリトリス切除の儀式や、ドイツ軍と関係した女の髪を切る制裁の黒白フィルムは脳裏にのこります。

二つ、女の目でリアルにみせてくれました。強姦される女の見る男を冷徹にみせてくれました。女は最後まで喜びの声などあげませんでした。

三つ、強姦への視点はするどく新鮮でした。強姦は女から愛を破してしまう。なぜならあの愛の行為と同じ行為が憎しみと侮辱そのものとしてぶつけられ、それが魂の奥底を破壊するものだから。

私は思う、労働の中で男は疎外され、酒とポルノという現代のアヘンを求める。そこで疎外化され、自己喪失した男はそのはけ口を何かに求める。「便所」としての女がそこにいる。そこで女は愛の源を失う。そうしてそんな女に育くまれる子どもらは「戦い」の根源である愛や希望をの芽をつまれていく。



事実は重い、歴史は重たい。この事実をときほぐし、この政治的しくみをほぐしていく視点をこの映画はしっかりとさし示している。

★「声なき叫び」上映後の交流会に参加して

細田英理子

私のまわりにはレイプされたりされかかったりした者が何人もいる。私は病院の診察や、示談の現場に立ち合ったり、警察の事情聴取につき合ったりした。とても他人事とは思えず、横りでいっぱいだ。

なぜ女は夜道を一人で歩けないのか？男が夜道で誰かになぐられた場合やられた男は責められるだろうか？女の場合だけやられた女も悪いといわれる。この度の「声なき叫び」の映画では明快にそのしくみ＝強姦の本質を解きあかしてくれる。感心しながら上映後の話し合いに参加したのだが、一人とんでもない意見をいう男がいてとても不愉快な会だった。

以下、状況を列記すると出席者は約30名（男は約$\frac{1}{3}$）、順

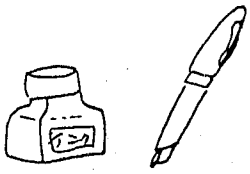
番に感想をいい半分位いった所で、司会者から「法律に明るい人です」という紹介で一人の男が発言した。「映画はみてないが、女が最後に死ぬのは強姦そのものとは関係ないはず。その人個人の問題だ。(みてないのにヨク言うヨー) 自分は強姦の事件3件位知っているがそのうち1件は明らかに女がひっかけた例だ。女も悪い。女は相手を好きでないとできないという話もあるが売春しているではないか。たいていの事件は抵抗しなければ殺されていない。殺されないためには抵抗せずにさせた方がよい」

映画で語られている事とは全く無関係であり、女の痛みを分かろうとしない一方的な発言だった。ああいう発言が公然とまかり通る社会だからこそ強姦はなかなかなくならないのだと思う。

あの映画は強姦が単に性的欲求をみたしたいためだけに起きるのではないことを語っている。うっぷん晴らしやハッあたりしたい時、女は手近な存在、自分は女より優位であると思うことで精神の安定を得ようとする。それを性を手段に行なうのが強姦だと。そしてそういう強姦をうみだす土壌 女を抑圧している社会の構造が問題なのだと。

その男の発言は映画に出てくる「女を抑圧している社会」の代表そのものだ。ああいう男が法律関係にいるのならレイプされた女は浮かばれない。訴え出ても2度レイプされるようなものだ。強姦救済センターの必要性を強く感じた。関心のある人がいたら連絡を下さい。それからなぜあの男をアドバイザーとして呼んだのか主催者側に疑問を感じた。せっかくの2時間、あんな男の話など聞かずに、映画で語られた事についてもっと話し合いをしたかった。残念だ。

※ 映画みた人、近くティーチ・インを開きませんか?
みてない人は9/12に上映されるのでみよう!



情報欄

- 82'女たちの反安保連続講座
  - 反戦・反核・反安保 ―女たちの8.15(デモと映画) 8/15 11:30 大通西9
  - 女たちの祭り ― スライド、映画(声なき叫び、女ならやってみな) 歌、語らい 9/12(日) 13:00〜21:00 婦人文化センター (中山千夏が来るかも……)
- 反核反原発全道住民会議結成大会 8/7・8 PM5:00〜翌10:00 白村海心寮
- 反核映画上映会 8/11・12. 婦人文化センター